

【本の紹介】

『ケーススタディ いのちと向き合う看護と倫理—受精から終末期まで—』

(原著『NURSING ETHICS through the Life Span』第4版)

エルシー・L・バンドマン+バートラム・バンドマン著

監訳●木村利人 訳●鶴若麻理/仙波由加里

人間と歴史社 (2010年3月発行)、3,675円



本書は、主に米国で看護教育を受ける学生にむけて、倫理教育用のテキストとして書かれたものである。しかしその内容は看護学生のみならず、医師や介護福祉士等の医療の領域での仕事をめざす学生や現職の医療関係者、またその他、生命倫理に興味を持つ学生や一般の人に対しても、多くの示唆をもたらす内容であると思われる。

本書は、1章から11章までにわかれており、1章から3章では、看護における道徳理論や倫理理論を適切に解説し、4章から11章では、人のライフスパンに照らし合わせながら、具体的な事例をもとに、看護実践で遭遇するさまざまな倫理的問題について思考を深めるよう構成されている。ライフスパンを具体的にわけると、家族関係と生殖に関する看護倫理(4章)、看護倫理と中絶の問題(5章)、新生児の看護ケアにおける倫理的問題(6章)、子どもの看護ケアにおける倫理的問題(7章)、青年期の看護ケアにおける倫理的問題(8章)、成人の看護ケアにおける倫理的問題(9章)、高齢者ケアにおける倫理的問題(10章)、終末期ケアにおける倫理的問題(11章)というように、まさに受精から終末期までを網羅している。1章から3章で解説されている倫理理論を取り入れながら、4章から11章では、人生のそれぞれの時期に起こりえる問題を、「医療者の立場としてどうするか」、「患者の立場だったらどうするか」、「患者の家族だったらどうするか」とさまざまな角度から読者に問いかける。

同じ疾病や健康の問題であっても、人生のそれぞれの時期によって、考え方や価値観は異なる。また患者自身の思いをなるべく尊重するという前提がありながらも、それを叶えてあげることに葛藤を感じることもある。たとえば、事例9.11では、ある25歳のホモセクシャルの患者の事例が出ている。彼はエイズにかかっており、亡くなる前に両親に会いたいと願っているが、両親は彼がホモセクシャルであることを知らない。彼は両親に自分の病因や病気の深刻さ、自分のライフスタイルを知られたくないため、スタッフに、両親

が病気に関して質問した時、白血病であるとか、何か聞きなれない病気であるように答えてくれと頼んでいる。見るからに死を目前にしている息子に会いにきた両親が看護師に「息子はエイズなのか」と質問するが、看護師は患者のプライバシーと秘密を守られる権利の方が、両親の真実を知る権利よりも優先されるべきなのだろうかといった問題だ。簡単には答えの見つかる問題ではないが、こうした事例も多くの人で話し合えば、いろいろな解決方法がみえてくるかもしれない。それは将来、医療の現場にこれらに似た問題とぶつかったり、家族や自分が医療にかかわる問題に接したときに役にたつかもわからない。

患者が、現在人生のどの時点にいるかで、本人の QOL を高めるのに一番大事なものも変わる。人生を通したそれぞれのステージにおこる倫理的な問題を考える上で、よい材料となる本である。(仙波由加里)